

1994年9月6日

\* 「女性と宗教 - キリスト教を中心に - 」 \*\*\*

大阪市立大学文学部 芦名定道

(70分+10分)

1 : 問題

現代日本は1970年代半ば以降新たな宗教ブームを迎えている(第三次宗教ブーム)。科学技術が隆盛を極めている一方で、新しく生まれた宗教(新宗教、新々宗教)に多くの人が引きつけられて行くのを見ることが出来る。それは、マスコミを騒がしている一部の宗教団体に限った現象ではない。この最近の宗教ブームを分析して気づくことは、このブームの主たる担い手が、若者と主婦であるということである。なぜ、現代の若者や主婦が宗教に引きつけられていくのか、彼らは何を求めているのか、これは極めて興味深い問題である。

今回のテーマではないが  
簡単に触れる

[いのうえせつこ氏の分析の紹介]

日本の新宗教の信者の約7、8割が主婦 キリスト教会の場合も

「ものみ塔」のある女性:「パートへ行ってわずかなお金をもらったり、近所でお茶飲み話をしたりするよりも、有意義な社会参加ですよねぇ」

子育て後の主婦たちにとって、宗教もまた、社会参加の一つ

「子どもの悩みなどを近所やPTAで話すと、うわさ話になってしまうけれど、ここではみんな真剣にその悩みを聞いてくれるからいい」「こんな真剣にやさしく私の話を聞いてくれて相談に乗ってくれるのだから、この人たちが言っていることはうそではない」

地縁・血縁のネットワークの消滅 相談する人間関係がない(会社人間・夫との対話が成立しない) なにかにすがりつく

「人間関係」づくり

新宗教は高齢化社会のなかで - 価値観が多様であればあるほど思い悩む・妻の役割、母親の役割だけでは人生がすげえなくなった -、自分の生き方を模索している女性たちに、一つのライフスタイルとして、様々な活動の場を提供している。

自己実現の場としての宗教

「ものみの塔」: 一般信者から教団幹部になるコース

一般信者 「奉仕の僕 長老 巡回監督 地域監督 日本支部(ペテル)長老 支部委員 調整者 本部長老 統合体」。女性は「奉仕の僕」まで

一般信者 「伝道者 補助開拓者 正規開拓者 特別開拓者 宣教者(海外へ出る場合)」。女性は特別開拓者(月に140時間の奉仕が必要)まで

実践倫理宏正会・倫理研究所

多くは専業主婦(30,40代の主婦が7~8割) 倫理研究所の場合は会場責任者は男性

このように、一方で様々な宗教活動を支える主な担い手は多くの場合女性であるにもかかわらず、しかし他方において宗教教団における女性の地位は決して高くはない。これは、最近の新宗教においても、またキリスト教、仏教、イスラム教、神道といった伝統的な諸宗教においても変わらない現実である。

[具体例]

日本の伝統的な祭・習俗における女性の排除

神輿や山車は男性のみ

つなをまたげない、近付けない

相撲の土俵

ローマ・カトリック教会では「女性の司祭職」を認めない、司祭は男性の役割

一見すると矛盾したこの事態をどのように理解したらよいのであろうか。女性に焦点を合わせるとき、宗教はどのような姿を表してくるであろうか。以下、キリスト教を具体的な分析材料とすることによって、「女性と宗教」という我々に与えられたテーマについての考察を進めて行こう。

問題：宗教はほんとうに女性を救うのか？

宗教は女性を利用しているだけではないのか？

## 2：キリスト教と女性

キリスト教における女性観について考える際に注意する必要があるのは、キリスト教の母体となったユダヤ教社会が典型的な家父長制社会であったということである - キリスト教の神は「父なる神」であり、神に「母的性格」を読み取ることは困難である - 。この男性中心的な性格は初期のキリスト教にも反映している。

戦前の日本をイメージせよ

[具体例]

とくに、女性の場合、結婚相手はほとんど例外なく、「家父長」によって決められ、当人の自由意志は事実上認められていなかった、一端婚約・結婚したら、夫は「何か理由があれば」妻を離縁できたのに、妻は事実上離縁する権利が認められなかった。

レビラート婚 (cf:戦中の日本など)

ルカ 20:27 ~ 40    マタイ 22:23 ~ 33    マルコ 12:18 ~ 27

ある人の兄が妻をめとり、子がなくして死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚し、兄の跡継ぎをもうけなければならない

モーセの十戒：「隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のもの」を一切欲してはならない 妻は財産の一部

「女性の生理が始まったならば、七日間は月経期間であり、この期間に彼女に触れた人はすべて夕方まで汚れている」(レビ 15:19)

肉体・血のタブー(「聖なるもの」から女性を排除、汚れ)

女の子の誕生は歓迎されない・父親は落胆

ユダヤ社会だけの現象ではなく、伝統的な人間社会において一般にそうであった。

このような男性中心社会でたくましく生き抜いた女性が聖書には少なからず登場する  
補足

しかし・もっとも、新約聖書の冒頭(マタイ1章)は、イエスの系図から始まる。この系図にはあきらかに意図的に4人の女性が挙げられているが、4人が4人ともにいわくつきの女性

「ユダはタマルによってペレツとゼラを」

タマルはユダの長子エルの子、そのエルが若死にしたので、その弟オナンがタマルと結婚して子をもうけるのが掟(レビラート婚)

亡夫の父と性交渉して子供を生み、跡継ぎにする

「サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父」

遊女 大胆に性交渉催促し結婚・異邦人

「ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父」

バテシバ 人妻 水戸黄門の悪代官

ともかく

そもそも、イエスの弟子たちの中心は12人の男性によって占められており、イエスとの密接な関わり合いにかかわらず、聖書の記述を見る限り、女性の弟子は弟子集団の指導的な地位にはついていなかったように思われる。この状態は、イエスの死後設立された原始キリスト教会においても同様であった。「聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語る事が許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で夫に聞きなさい」(第一コリント14:33~35)。 悪名高いパウロの言葉

教会の指導者は男性でなければならない

[この引用の分析と問いの提出]

いり厳密に言えば

パウロに女性観のアンビバレンツ ヘレニズム世界に生きるパウロの実情

1:「あなたがたは皆、キリスト・イエスに結ばれた神の子なのです。バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこにはもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(ガラテヤ3:26~28)。 民族・身分・性別による差別を否定

イエス・キリストを信じる者としての男女の平等性

2:「すべての男の頭はキリスト、女の頭は男」(第一コリント11:3) 「礼拝ではかぶり物をかぶれ」、教会では「女性らしさ」を要求。女性のおかれた現状を追認

ポイントは

複雑な問題状況・キリスト教と言っても女性観はきわめて多様 幅がある

### 3 : 新約聖書の女性

聖書には、個性的で魅力的な人生を生き抜いた少ないからぬ女性が登場するが、ここでは新約聖書に現れた「マリア」という名の女性に注目することにしよう。

マリアと言えば、イエス・キリストの母マリアを思い起こす人が多いかもしれない。しかし、新約聖書に登場し、イエスを取り巻いていた女性たちの中には複数のマリアたちが存在していたのである（ヨハネ 19:25、マタイ 27:56、使徒言行録 12:12）。

[ 具体的に ]

「イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた」（ヨハネ 19:25）。

「大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた」（マタイ 27:56）。

ベテニアのマリア

彼女らはそれぞれに極めて個性的な光を放っている。以下、これらのマリアたちに関する記事を検討することによって、聖書の女性観について考えてみよう。なお、以下の引用は、『新共同訳聖書』（日本聖書協会）から行うことにする。

イエスの母マリア

「『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように』（ルカ 1:38）

クリスマス・天使ガブリエル・処女降誕

「わたしの魂は主である神をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。この身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったのですから。……主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた者を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」（ルカ 1:46 ~ 56）

「イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。そこで、ある人がイエスに、『御覧なさい。母上とご兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます』と言った。しかし、イエスはその人にお答えになった。『わたしの母とはだれか。私の兄弟とはだれか』。そして、弟子たちの方を指して言われた。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでもわたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である』（マタイ 12:46 ~ ）

イエスの母マリアに関する新約聖書の記事は、この女性に対する様々な評価を反映している。一方では神に従順な女性像、他方では子供への愛のあまりイエスを理解できない母親、そして「マリアの讃歌」において宗教的、経済的、政治的に差別され、抑圧された人々に対する神の恵みを高らかに歌ったマリアなど。

[ 分析 ]

新約聖書でもっとも有名かつキリスト教の歴史で複雑な位置を占める女性。おそらく一般には、聖母マリアという清純なイメージか（やさしさ・イエスに取り次いでくれる。被昇天説）？

しかし、新約聖書そのものを見ると、結構人間らしい側面を持った女性であることがわかる（母マリア像は複雑）

1:受動的で従順な女性 - 積極的で大胆な女性

神の言葉を疑わずに従順に従う・宗教的に敬虔な女性

しかし、社会変革ともいえることを歌うきわめて積極的かつ大胆な女性

反権力、学生運動の女闘士

現代なら未婚の母・スキャンダル・父親はだれだ

現実のマリアは？

不明 聖書の歴史的研究へのコメント？

わかるのは、聖書テキストに収められた古い伝承において、つまり初期のキリスト教会において、マリアがどのように受けとられてきたか、ということ

2:おもしろいのは、一般の聖母マリアとはかなり違った極めて人間臭いマリア像が存在するということ、それだけに信憑性を感じる

聖書は読み様によってはきわめて人間

くらいドラマである

伝承を含めて考えると、イエスの父ヨセフは大工であり、マリアとの間にイエス以外に多くの子供がおり、イエスの若いときに亡くなった。父の死後イエスは宗教家として活動するまで、おそらく 30 代の前半くらいまで、母マリアを助け、弟妹を養っていたと思われる。ところがあるとき突然宗教に目覚め、親兄弟を捨てて宗教活動にのめり込んで行く。それに対して、母マリアがいわばイエスは気が狂ったと思い、なんとか家に連れ戻そうとするのは良く理解できる。皆さんの子供がイエスのようになったらどうする？ - 統一教会、オウム真理教など - 、同じ様に振る舞わないだろうか。 マルコ 3 : 2 1

身内の人たちはイエスのことを聞いて

取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。

息子への無理解な母・子離れの問題 血縁関係の相対化

しかし、他方、イエスの死の前後の弟子の集団に母マリアが加わっていたという記事もある（イエスへ従う・見守る母）

ヨハネ 19:25、使徒言行録六 1:14

こちらのマリア像が主流になって行く。

[ 注意点 ]

永遠の罪無き乙女（処女性） イエスを見守る優しく美しい母（母性）

母マリアに対する高い評価は生身の女性としての評価ではない。キリスト教会における女性の位置

しかし、聖書に登場する女性が、生身の様々な人生の悩みを抱えて生きる現代にも普通に見られる側面を持っていたことは注目すべきである。宗教を信じるといっても、突然完

全な聖人君子になるわけではない

### マグダラのマリア

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちにマグダラのマリアは墓にいった。……マリアは墓の外に立っていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を来た二人の天使が見えた。……」(ヨハネ 20:1 ~ 18)

十字架上で処刑されたイエスに最後までしたがったのは、12人の男性の弟子たちではなく、元悪霊つきでイエスに助けられたマグダラのマリアなどの女性の弟子たちであった。

[分析]

1:女性がイエスの弟子として共に旅をしたことの意味

イエスと女性の関わりは、当時のユダヤ社会では型破り

「すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出し病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれたマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、そしてスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった」(ルカ 8:1 ~ 2)

イエスの宗教活動は、弟子たちを連れた旅行生活における、教えといやし。その弟子のなかに、多くの女性が存在していた。つまり、女性たちと共に旅行する宗教家、これは当時の宗教家としては突出した振る舞いであり、批判者の攻撃のたねになったであろう。

スキャンダル

「イエスの方舟」事件(1978 ~ 80)。

イエスが女性にきわめてオープンであったことはイエスにおける平等主義を示唆する。男の弟子だけが偉いのではなく、女性も一定以上の地位を認められた。

しかも、そのなかに元悪霊付きの女性までいた。悪霊 一種の精神的な病？

罪人、汚れた人、

社会的宗教的に差別される

病いは罪の結果

さきのマリアの讃歌

社会秩序を乱す者・危険人物 十字架

2:イエスは十字架において死刑にされたが、その最後は悲惨であった。自分の直弟子はすべて逃げてしまい、孤独の中、見捨てられた状態で死に直面した。しかし、男性の弟子がすべて逃げた後で、最後までイエスの近くにいたのが女性たち(ヨハネ 19:25)であったという記事が存在する。そして、最初に復活したイエスと出会ったのも、女性、マグダラのマリアであった。この史実性はなんとも言えないが、男性と女性の対照的な姿に注目。後の教会では、聖書が成立することには完全な男性中心社会となり、女性の教会における地位が低かったにもかかわらず、聖書自体のなかに、十二弟子(男性の弟子)の直系であり、その権威を受け継ぐ教会の男性指導者にとって、都合の悪い記事が含まれている。これは、この記事の信憑性を高める。しかし、きわめて平等な女性観をもち、社会の伝統や風習における人間差別性を糾弾したイエス像にも合致する。

[ここでイエスの宗教思想の特徴をコメントする]

イエスの女性観：律法(社会の掟・因習)の相対化、宗教は人間のためにある

社会のきまりや風習は何のためにあるのか、それは人間のため、人間が人間らしく生きるため。人間を縛る宗教は批判されねばならない(マルコ 2:23 ~ 28)  
規則は規則だから絶対的に守るべき、なのではない

3:「家の教会」における女性の指導的地位 教会制度の確立(省略あるいは後の4へまわす)

キリスト教はまずイエスを中心とした弟子の集団として始まり、イエスの死後ユダヤ教の周辺に成立した新宗教としてエルサレムなどで発展し、後に地中海世界のローマの諸都市へと勢力を拡大していった(都市型宗教)。地中海世界に広まる最初の段階における教会は、都市においてキリスト教に帰依した個人の家を拠点にして、そこに人々が集まるという形態、いわゆる「家の教会」と呼ばれるものであったと言われる。古代ローマの都市では、日中は男性がほとんどおらず、家を取り仕切るのは主婦であったと言われる。したがって、家の教会を代表するのも女性であり、とうぜん宗教的指導者としての女性の地位はそれに相応しいものであったことが想像できる。そもそもエルサレムで最初に成立した家の教会は、マルコと呼ばれるヨハネの母マリアの家であったと思われる(使徒 1:13)。この最初期のキリスト教の「家の教会」を背景に、パウロの民族的・社会的・性的差別の撤廃の主張はなされたのであろう。

実際、ローマの信徒への手紙 16:7 の「わたしの同胞で、一緒に捕らわれの身となったことのある、アンドロニコとユニアスによろしく。この二人は使徒たちの中で目立っており、わたしより前にキリストを信じる者になりました」とあるが、この二人の内の「ユニアス」なかでと男性名で訳された人物は「ユニア」という女性であったという説をとる研究者が存在する。もしそうであるとすれば、最初期のキリスト教会には女性の使徒が存在したことになる(文献表の荒井献氏の説)。

しかし、キリスト教が社会的勢力を拡大し、教会制度を確立するについて、教会内部では、当時の家父長社会における「女性らしさ」が強調されるようになり、教会の指導者である「使徒職」は男性に独占されるようになる(使徒はすべて男性 カトリック教会)

cf:「現代中国の教会」の中心にある言われる「家の教会」における女性の地位がどのようなものであるかは興味深い研究テーマである

ベタニアのマリア

「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためにせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。『主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください』。主はお答えになった。『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない』(ルカ 10:38 ~ 42)

「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中か

らよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いていた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。……弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。『なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人に施さなかったのか』。……イエスは言われた。『この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない』(ヨハネ 12:1 ~ 8)

[分析]

イスカリオテのユダは正論か？

1:皆さんは、このマルタとマリアの話しをどのように読むでしょうか。キリスト教会の女性の集まりでは、自分はマルタ型であるとかマリア型であるとかということがしばしば話題になる。家の家事を取り仕切り、客の接待の準備の面に気を配り、裏方に徹するタイプと、食事などのもてなしの準備よりも客の席に同席した会話に加わるタイプ。日本の古い家父長制の伝統では、男女については、男性は外で働き、女性は内を守る、客と同席した接待といった公的な外の世界に対する家代表するのは男性であり、女性は客の前などに出ず、接待の裏方となる、このような役割分担が行われていた - ここに出席の方も、マルタの言い分に同意する人が少なくないのではないか - 。古代のユダヤ教社会でも同様であり、したがって、マルタの振る舞いは社会的に普通の姿であり、マリアはその家の男性に対して伝統的に期待された役割を果たしたことになる。これはイエスのために高価な香油を足に塗ったという振る舞いにも通じるものがあると言えるかもしれない。

いずれにせよ、ここで注目すべきは、いわば男性的に振る舞い女性らしくないマリアにルを批判するマルタに、イエスが、「必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだのだ」と言っている点です。女性の弟子はイエスの身の回りの世話をし、イエスの深い宗教的な教えを学ぶのは男性の弟子の特権という、男性中心社会にありがちな男女の役割分担の発想は、イエスにはないわけである。これは女性の弟子を旅をするというイエスの生活スタイルに一致する。イエスらしい

イエスにとって大切なことは、社会の伝統に縛られた男性らしさとか女性らしさ、あるいは母親らしさや父親らしさではなく、「自分にとってほんとうに必要な良い方」を選ぶことなのである。この場合は、イエスに従い弟子になることが意味されているのであろう。

社会の通念や既成概念からの自由：自分らしさ・人間らしさの実現

#### 4：宗教は女性を解放するか？

イエスの宗教思想の特徴は、人間を縛っている様々な束縛（宗教的な束縛を含めて）からの解放という点に認めることができるが、それは以上見た女性との関わりからとくにはっきりと読み取ることが可能である。人間を非人間化する既存の価値観、つまりユダヤの伝統的な宗教観を逆転するイエスの発言は、その後男性中心主義に逆戻りしたキリスト教会を超えるものとして、現代の思想状況においてその意義をいよいよ明らかにしつつある。伝統的な宗教や新しい新宗教が古い家族観や女性観を引きずっている場合が少なくないのに対して、キリスト教に限らず本物の宗教と呼ばれるに値する宗教は、女性を女性として肯定し認める思想、つまり女性と男性の双方を人間として解放する思想をわたしたち

に示しているのである。

[まとめ]

これまでの話しをまとめてみよう。まず、イエスにおいて、あるいはキリスト教の最初期の時代においては、女性は男性と同等の資格で教会において様々な役割を果たしていた。つまり、男女の平等意識がかなりの現実性をもっていた。

しかし、その後のキリスト教の歴史の大部分の期間を通して、キリスト教会もその制度面において、つまり公的には男性優位、男性中心の社会であり、教会の指導者は男性に独占され、女性的なものの価値は低く評価されてきた。これは現在のキリスト教においてもかなりの程度妥当する。

最後に考えたいのは、なぜこのような変化が生じたのか、どうしてキリスト教はイエスの教えにもかかわらず男性中心社会になったのか、という問題である。

この点については、様々な原因を検討する必要がある、単純に答えることができないわけであるが、次の点は指摘できるであろう。この変化は、キリスト教がイエスを中心とした小集団から、一定の社会勢力をもった制度化された教会に発展するプロセスで生じた。制度化された教会は、その組織を安定した形で維持するには、それを取り巻く環境世界から認知されることが必要になる。世間の目。組織や制度にこだわらない小集団においては、社会の慣習などは無視して自分たちの理想を純粹に主張することが比較的容易であろう。しかし、まわりの世界あるいは世間を無視する集団は世間から糾弾され排除されることになる。つまり、反社会的な存在というレッテルがはられるわけである - 現代日本の新宗教の場合を考えよ - 。したがって、組織を維持し発展させるには、世間から受け入れられるような思想と制度を確立しなければならない。これはキリスト教会においても避けることのできない運命であった。では、キリスト教が適応しようとした社会とは何であったか、それはユダヤ社会でも、地中海の都市社会でも、典型的な男性中心の家父長的社会であったのである。この古代の社会の良い風習をみだすような集団は、危険集団として排除される、排除されたくないならば、社会の認める男性らしさや女性らしさを肯定することが必要になる。このような護教的な意図が、先のイエスの女性観から伝統的なキリスト教的な女性観への変化の背後に作用したのではないだろうか。世間の価値観への適合

しかし、もしイエスの女性観を完全に失ったならば、それはもはやキリスト教と呼ばれることは不可能なものに変質したことになり、キリスト教であり続けようとするかぎり、社会と妥協しつつも、イエスの教えを何らかの仕方で保存する必要がある。だからこそ、一方では教会の主流が男性中心的な組織を作りつつも、他方で聖書のなかにこの男性中心性を否定するような言葉が残されることになったのであり、キリスト教の歴史においては、女性の宗教的な地位を押し上げるような反主流派の運動が繰り返し発生したのである。

したがって、キリスト教、聖書をとおして、女性と宗教の問題を学ぶわれわれに与えられた問いは、このような多様な聖書の女性観の中から、自分はどのような女性観を意味のあるものとして選ぶのか、ということなのである。何を選ぶかによって、宗教は女性を解放し、救うのかという問題への答え方は違ってくるであろう。

高齢化社会(人生80年)・価値の多様化、この中で自分はどのように生きるのか、自分らしさとは? 自分を見つめ直すこと

そもそもわたしたとはどのような女性観を持っているのか - 女性の敵は女性・女性も意外と男性中心的、マリアを批判したのはマルタ - 。現在世界を生きる自分の女性観を問い直すところに、現代人がイエスの宗教思想を学ぶ少なくとも一つの意義が存在するのである。